福岡市埋蔵文化財調査報告書 第785集

飯 倉 B 遺 跡

―飯倉Ｂ遺跡 第２次調査―

２００４

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では開発に伴って消滅する埋蔵文化財について、事前に発掘調査を行い、記録保存という形で往時の有様を後世に伝えています。

本書は平成14年度に行いました飯倉Ｂ遺跡第２次調査の内容について報告するものです。この調査では古墳時代後期（６世紀）の住居や掘立柱建物が検出されるなど多くの成果を挙げることができました。今回の調査により判明した多くの事実は、この地域における歴史を考える上で大きな手がかりとなるでしょう。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとする御協力を戴きました株式会社地行をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成16年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　生　田　征　生

—例　言—

・本書は福岡市教育委員会が2003年２月３日から2003年３月20日にかけて行った飯倉Ｂ遺跡第２次調査の報告である。調査は藏冨士寛、赤坂亨が担当した。

・本書で使用した遺構実測図は担当者の他、遠藤茜、浜田小百合、迫田恭伸（以上福岡大学学生）が作成した。

・本書使用の標高は海抜高。方位は磁北である。

・本書の執筆、編集は藏冨士が行った。また遺物の実測には下原幸裕（福岡大学大学院生）の手を煩わせた。

・本書に関わる資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査の組織 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
1．周辺の状況 …… 2
2．飯倉遺跡群 …… 3
Ⅲ　調査の記録 …… 4
1．遺跡の状況 …… 4
2．遺構・遺物 …… 6
Ⅳ　まとめ …… 18

挿図目次

図１ 周辺遺跡（1/25.000） …… 2
図２ 調査位置（1/4.000，1/300） …… 3
図３ 遺構の状況（1/200） …… 4
図４ 遺構配置（1/120） …… 5
図５ 竪穴住居１出土遺物（1/3） …… 6
図６ 竪穴住居１（1/50） …… 7
図７ 竪穴住居２・５出土遺物（1/3，1/2） …… 8
図８ 竪穴住居２（1/50） …… 9
図９ 竪穴住居３（1/50） …… 9
図10 竪穴住居４（1/50） …… 10
図11 竪穴住居５（1/50） …… 10
図12 掘立柱建物１（1/50） …… 11
図13 掘立柱建物２・３（1/50） …… 12
図14 掘立柱建物４（1/50） …… 13
図15 掘立柱建物５（1/50） …… 14
図16 掘立柱建物出土の遺物（1/3） …… 15
図17 土坑１・２・３・４（1/50） …… 16
図18 土坑３出土遺物（1/3） …… 17
図19 溝出土遺物（1/3） …… 17
図20 包含層出土の遺物（1/3） …… 18

図版目次

図版１　上 調査区東側（西より）　中 調査区西側１（東より）　下 調査区西側２（東より）
図版２　上 竪穴住居１（南より）　中 竪穴住居３・４（西より）　下 竪穴住居５（西より）
図版３　上 掘立柱建物群（西より）　中 掘立柱建物１（東より）　下 掘立柱建物２・３（北東より）
図版４　上 掘立柱建物３（南より）　中 掘立柱建物４（西より）　下 掘立柱建物５（西より）

Ⅰ　はじめに

1. 調査に至る経緯

平成14年12月２日、株式会社地行より、城南区荒江１丁目592番他における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財事前審査報告書が提出された。これを受けて福岡市教育委員会では試掘調査を実施し、遺跡が存在することを確認した。両者の協議の結果、遺跡への影響は避けられないということになり、記録保存という形での対応が図られることとなった。調査の開始は平成15年２月３日。平成15年３月20日にすべての作業を終了した。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託　　株式会社　地行
調査主体　　福岡市教育委員会
調査総括　　文化財部埋蔵文化財課　課長 山崎純男　　調査第１係長 力武卓治
事前審査　　文化財部埋蔵文化財課　事前審査係長 池崎譲二　田上勇一郎　久住猛雄
庶務担当　　川村浩旭
調査担当　　藏冨士寛　赤坂　亨
調査作業　　阿比留忠義　有江笑子　井上八郎　海津宏子　下司照枝　堤篤史　永嶌重俊
　　廣瀬　梓　吉川春美
　　遠藤　茜　迫田恭伸　浜田小百合（以上、福岡大学学生）
整理作業　　柴田加津子　萩本恵子　日名子節子

遺　跡　名	飯倉Ｂ遺跡第２次				
遺跡調査番号	0259		遺　跡　略　号	IKR－B	
地　　番	城南区荒江１－592他		分布地図記号	73茶山	
開　発　面　積	597㎡	調査対象面積	433㎡	調査面積	338.6㎡
調　査　期　間	2003.2.3～2003.3.20				

Ⅱ　位置と環境

1. 周辺の状況

早良平野は福岡平野、糸島平野の間に位置する平野で、平野の中央には室見川が流れ、このような河川の沖積作用によって、早良平野は形成されている。大小河川の発達した早良平野では様々な台地や微高地が存在し、その上には多くの遺跡が営まれている。その中でも特に著名なものの一つとして、有田遺跡群を挙げることができるだろう（図１）。有田遺跡群は西を室見川、東を金屑川に挟まれた標高15m程の台地上に営まれた遺跡であり、弥生時代前期には拠点的集落が営まれ、古代には官衙とも目される建物群が検出されている。

早良平野の東側は油山から延びる飯倉丘陵によって、福岡平野と画される。飯倉丘陵は標高10～30m程の低丘陵で、丘陵上には多くの遺跡が営まれている。この飯倉丘陵上に存在する遺跡の総称が飯倉遺跡群であり、先述した有田遺跡群は飯倉遺跡群の西側1.5kmという、近接した位置に存在している（図１）。

図１　周辺遺跡（1 / 25.000）

2. 飯倉遺跡群

飯倉丘陵は長さ3.5km、幅0.5km程の丘陵であり、その上を占地する飯倉遺跡群もその範囲は狭長なものとなっている（図１）。飯倉丘陵は小河川の開析作用によって、いくつかの舌状台地に分岐しているが、飯倉遺跡群はその地勢を勘案して現在Ａ～Ｈの８群に分けた把握がなされている。しかし、丘陵上は大きく削平を受けている部分も多く、遺跡の分布にはかなりの粗密が認められ、この区分は必ずしも遺跡の実際を反映したものではない。また、今回調査を行ったＢ遺跡第２次調査にもみるように、近年では丘陵斜面や裾部といった低地の部分において、遺跡が発見される傾向にある。

飯倉遺跡群では各時代にわたる遺跡が発見されている。旧石器時代（Ｅ・Ｆ・Ｇ遺跡)、縄文時代（Ｅ・Ｇ遺跡）に始まり、弥生時代には集落（Ａ・Ｃ・Ｄ遺跡)、墓地（Ｅ・Ｇ・Ｈ遺跡）と本格的な遺跡の形成が始まる。中でも甕棺墓より出土した細形銅剣（飯倉唐木遺跡)、Ｄ遺跡の住居址内より出土した銅鏡鋳型（中村ほか編1995）は特筆すべきものといえよう。古墳時代には集落（Ａ・Ｄ・Ｆ・Ｇ遺跡）の他、いくつかの古墳が丘陵上に散在する（飯倉古墳群)。この後も古代～中世にかけて、集落（Ｃ・Ｆ遺跡)、墓地（Ｅ遺跡)、そして製鉄址（Ｇ遺跡）が検出されている。

飯倉Ｂ遺跡はちょうど丘陵の北端にあたる。今回の調査は第２次調査にあたり、第1次調査では古墳時代住居や古代の溝が検出されているが（米倉2003)、総じて調査件数も少なく遺跡の状況は明らかにされていない。先にも述べたように今回の調査においては、遺跡範囲の境界部分で遺構が検出でき、遺跡の更なる広がりも予想される（図２)。

中村　浩・池田榮史編1995『飯倉Ｄ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第440集

米倉秀紀2003「飯倉Ｂ遺跡群第1次調査報告」『福岡市文化財年報』Vol.16　福岡市教育委員会

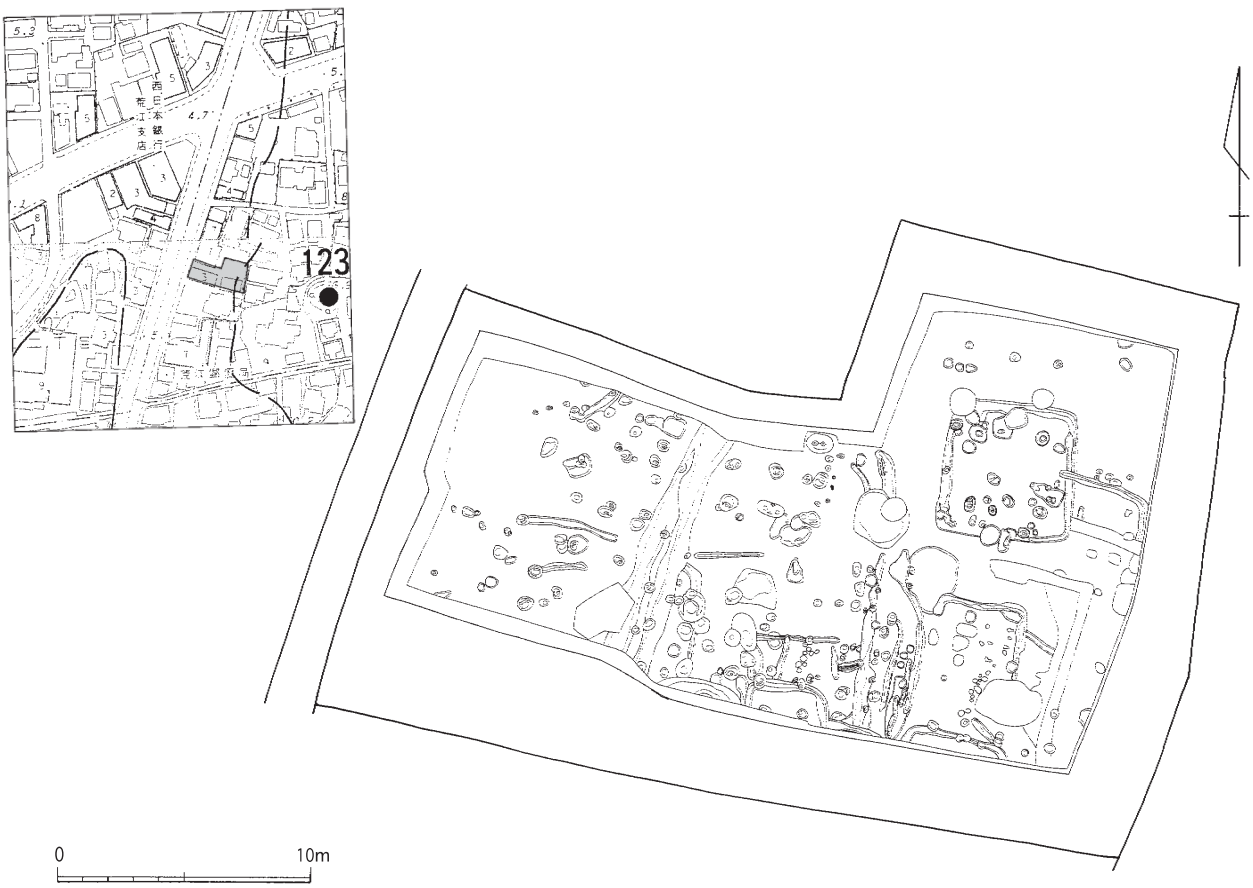


図２　調査位置（1 / 4.000、1 / 300）

Ⅲ　調査の記録

1. 遺跡の状況

調査地点は飯倉遺跡の北寄りに存在し、東西の丘陵部に挟まれた谷の斜面部分に相当する。周囲は宅地化され、特に調査地点の東側は切り立った崖状を呈しており、その下場がそのまま調査地点へと続いているため、調査前から相当の削平がなされていることが予想された。しかし実際調査に着手してみると、遺存状況は確かに悪いものではあったが、調査区のほぼ全面に遺構の存在が確認でき、結果的には予想以上の成果を挙げることができた（図４）。

調査では、遺構検出面を暗黄褐色層（地山）に設定し、まず重機による表土剥ぎを行った。排土置きの都合により、計２回の土砂反転を行っている。表土剥ぎの結果、地山は削平のため調査区東端より７ｍ程が平坦となり、それから西へなだらかな斜面となって下っていくことが明らかとなった（図3)。東端より７～12mの部分で傾斜がやや急になっており、この部分が丘陵本来の裾付近に相当するのだろう。斜面部分には間層を挟んで計２つの遺物包含層が存在する（図３）。いずれの包含層においても含まれる遺物は古墳時代後期に相当するものである（後述)。なお、調査区の西端には灰褐色シルト質土の堆積がわずかに顔を出している。この層は西側調査区外に広がっているものだろう。

調査区の東側にやや攪乱が多く、中央西寄りに近年の掘削による大溝がある他は、遺構面が受けた攪乱による影響はあまり多くはない。ただそれでも各遺構の中には深さ数cmしか残っていないものも多く、検出状況は必ずしも遺跡の状況を正しく示しているものではない。

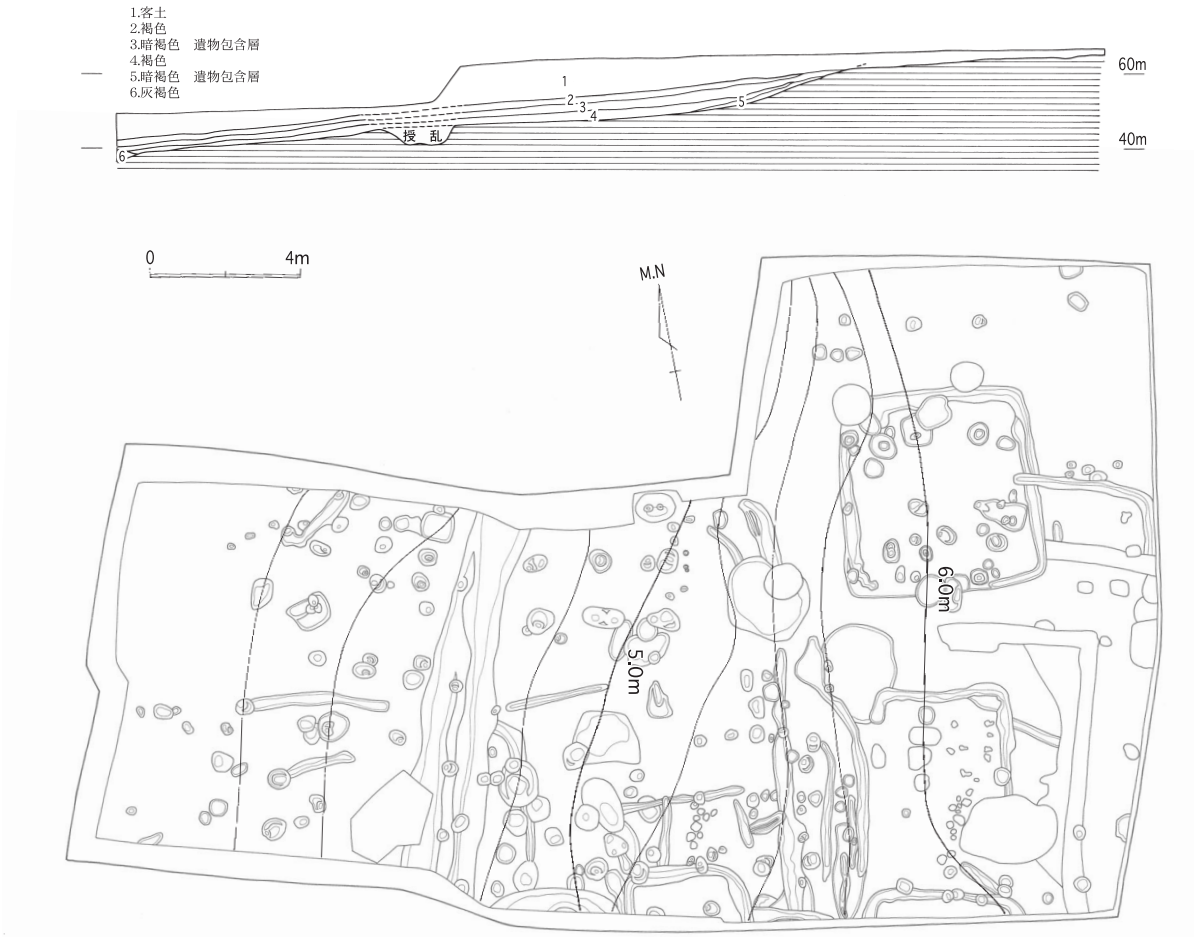


図３　遺構の状況（1 / 200）

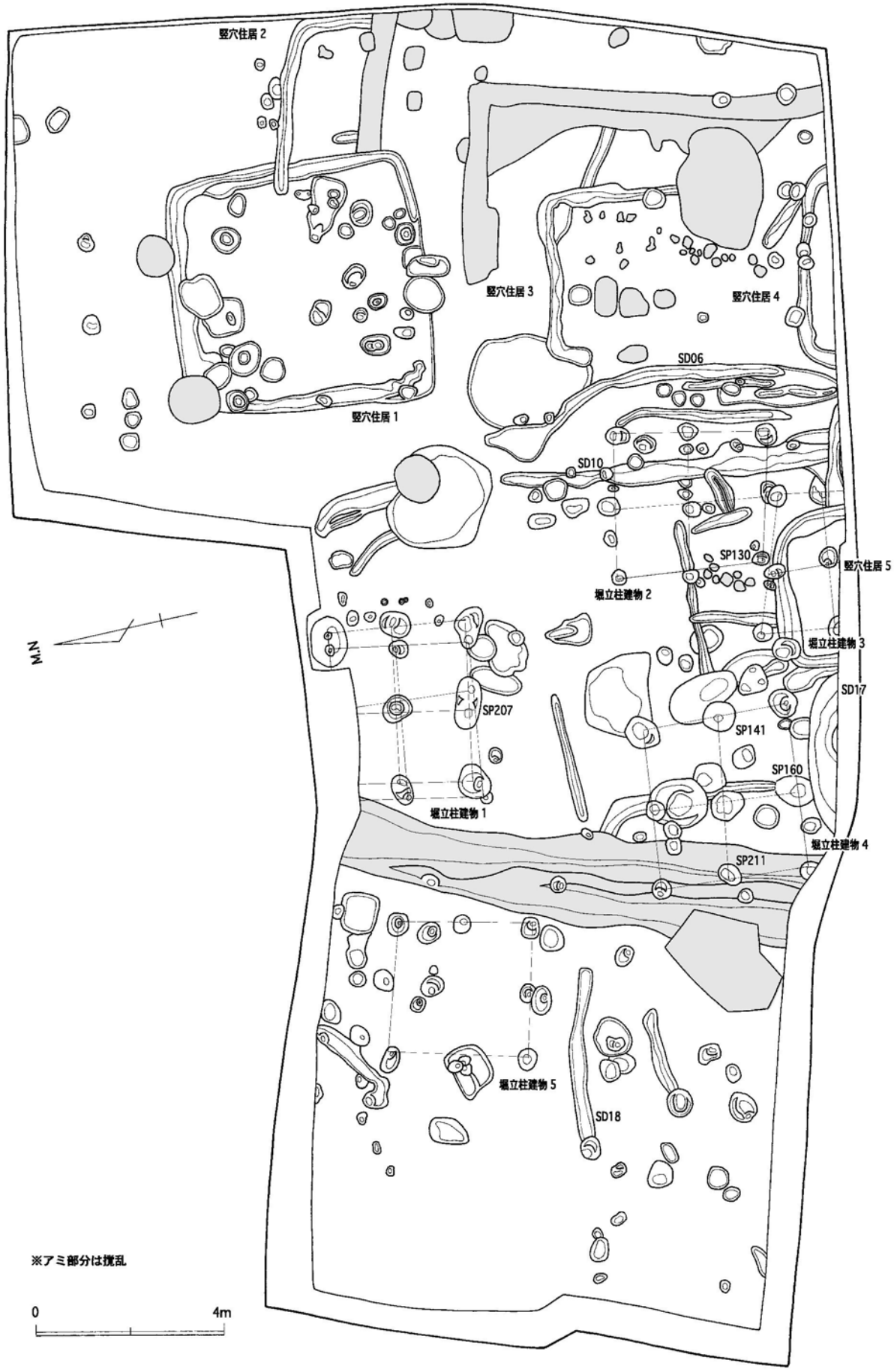

竪穴住居 2
竪穴住居 3
竪穴住居 4
竪穴住居 1
SD06
SD10
SP130
竪穴住居 5
堀立柱建物 2
堀立柱建物 3
SD17
SP207
SP141
SP160
堀立柱建物 1
堀立柱建物 4
SP211
堀立柱建物 5
SD18
M.N
※アミ部分は攪乱
0
4m

図４　遺構配置（1 / 120）

2. 遺構・遺物

(1) 遺構

先にも述べたように、激しい削平を受けながらもかろうじて遺構の検出をすることができた。その種類としては、竪穴住居、掘立柱建物、各種の溝や土坑がある（図４）。以下にそれぞれの概要について記していくことにする。

A　竪穴住居（図５～11）

竪穴住居は５軒が存在する。いずれも遺存状況は悪く、調査区東側に存在するものは深さ数cmしか残っていないものもある。また、調査区内にはいくつもの浅い溝があり、直線状に走るものもいくつか見受けられるが、これらが竪穴住居の壁溝に相当する可能性がある。竪穴住居の実数は更に多いものであったのだろう。

竪穴住居１（図６）

調査区東よりに存在し、この調査においてはその全形を窺うことのできる唯一のものである。一部を竪穴住居２と切り合う。一辺５～5.3mを測る方形の竪穴住居で、住居北壁の中央には竈を有する。深さ数cmしか残っておらず、遺存状況は極めて悪い。住居内には４本の主柱穴があり、周囲には壁溝が巡る。壁溝は一部途切れている部分があるが、本来は全周していたのだろう。

出土遺物（図５）

遺存状況が悪かったため、わずかな遺物が出土したのみである。１・２は須恵器杯蓋である。１は口径（復元）14.4cm を測り、体部と天井部の境は浅い段をなしている。２は口径（復元）15.2cm を測り、体部と天井部の境には沈線が巡り、口縁端部は弱い段をなしている。３は甕胴部片である。摩耗が激しく、調整は不明である。

竪穴住居２（図８）

竪穴住居１と切り合いを有し、壁溝のみが部分的に残るものである。壁溝は幅30cm程、深さは最も深い部分で12cm を測る。壁溝は直線的で、直角に折れ曲がる部分が存在する。この状況をみれば竪穴住居２は住居１と同じく、方形を呈する住居であった可能性が高いといえ、遺存部分から推測すれば一辺は5.6m前後であったのだろう。住居１とほぼ等しい規模であったといえる。尚、主柱穴は検出できなかった。住居１に切り込んでおり、住居１に後出する。

出土遺物（図７-３）

ごくわずかな遺物が出土したのみである。土器類は細片が多く、図化に耐えない。また住居２の壁溝からは鉄製品が１点出土した。３に示したその遺物は刀子である。残長7.0cmを測る。

竪穴住居３（図９）

調査区の東より、住居１の南側に位置する。壁溝が部分的に残るのみである。壁溝は幅20～40cm、最も深いところで深さ14cmを測る。壁溝は「コ」の字形を呈しており、他の住居と等しく方形を呈する住居であったことが分かる。その規模は一辺3.5～3.7m程に想定できるだろう。住居１・２に比して一回り小形である。尚、主柱穴の検出はできなかった。

出土遺物

図化に耐えない土器の細片がわずかに出土したのみである。

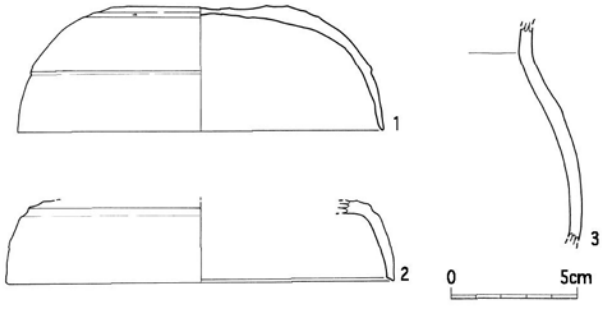


図５　竪穴住居１出土遺物（1 / 3）

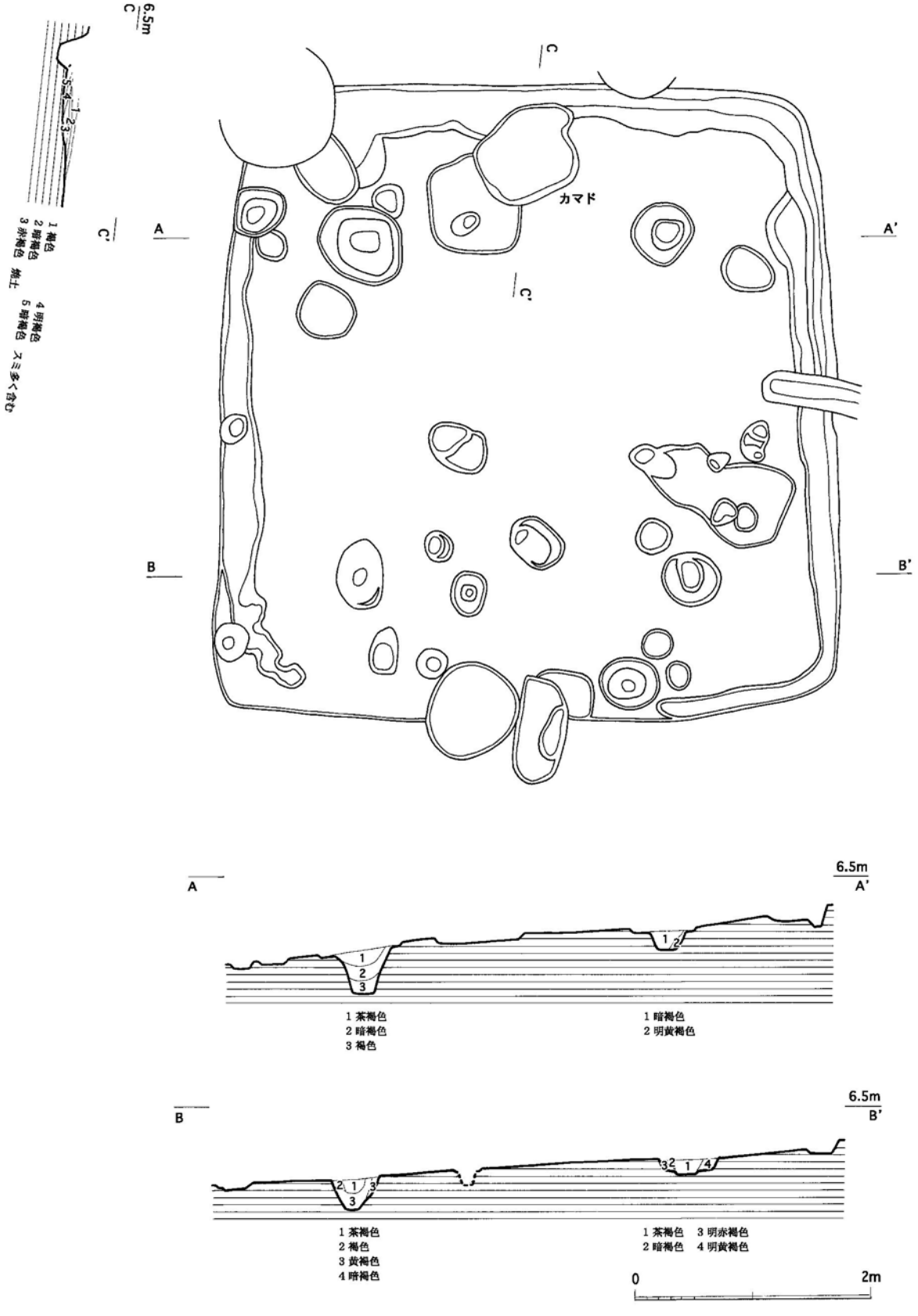

6.5m
C
C'
1 褐色
2 暗褐色
3 赤褐色 焼土
4 明褐色
5 暗褐色 スミ多く含む
カマド
A
A'
B
B'
6.5m
A'
1 茶褐色
2 暗褐色
3 褐色
1 暗褐色
2 明黄褐色
6.5m
B'
1 茶褐色
2 褐色
3 黄褐色
4 暗褐色
1 茶褐色 3 明赤褐色
2 暗褐色 4 明黄褐色
0
2m

図６　竪穴住居１（1 / 50）

竪穴住居４（図10）

調査区の南西側隅に検出したもので、住居の大部分は調査区外に存在する。住居３の南側、住居５の東側に位置する。調査区内では壁溝が存在するのみである。壁溝は「コ」の字形を呈し、幅20～30㎝、深さは最も深い部分で10㎝程を測る。遺存状況は極めて悪い。壁溝の状況をみれば、住居４も方形を呈するものであることが分かり、その規模は一辺4.5m程に復元できるだろう。壁溝の周辺に存在するピットは住居に伴うものではなく、壁溝を切り込んでおり、その多くは住居４に後出するものであろう。

出土遺物

図化に耐えない土器の細片がわずかに出土したのみである。

竪穴住居５（図11）

調査区中央の南端に検出した住居である。住居の半ばは調査区外に存在する。壁溝が「コ」の字形に残るのみであり、その壁溝は幅25～40cm、深さ40㎝を測る。他の住居に比べれば遺存状況は良い。周囲には多くのピットが存在するが住居に伴うものではなく、また壁溝を切り込んでおり、その多くは住居5に後出する。尚、住居内にはピットが２つ存在し、その配置は主柱穴を思わせるが、筆者は主柱穴ではなく掘立柱建物３の柱穴であると判断している。壁溝からみれば、住居５も方形を呈するものであるといえ、その規模は一辺3.3m程に想定できるだろう。

出土遺物（図７-１・２）

土器のみがいくらか出土した。いずれも古墳時代須恵器・土師器であるが細片が多く、ここでは図化に耐える資料についてのみ述べる。１は須恵器杯蓋である。口径（復元）14.2㎝を測る。天井部には回転ヘラケズリ調整を施し、口縁端部は丸く収める。２は土師器甕の口縁部片である。内器面には縦方向のヘラケズリを施す。

B　掘立柱建物（図８～16）

掘立柱建物は５棟検出できた。いずれも調査区中央にまとまって存在している。建物の方向はほぼ等しく、相互に関連する建物であったことが分かる。また、それは竪穴住居の方向とも一致する。２×２軒の総柱建物（1・2・3・4）と２×２軒の側柱建物（5）がある。掘立柱建物１は立て替えを行っており、掘立柱建物２と３はピットの一つが切り合い関係にある。柱穴をみると、竪穴住居や溝と切り合いのあるものは、多くの場合これらを切り込んでいる。いくつか建物を復元できないピットがあり、実数は更に多いことが予想される。

掘立柱建物１（図12）

調査区中央の北端に位置するもので、一部が調査区外に存在する。柱穴２つが未検出であるが、おそらく２×２軒の総柱建物であると考えられる。建物の主軸をN―8～10°―Eに取り、規模は南北2.9

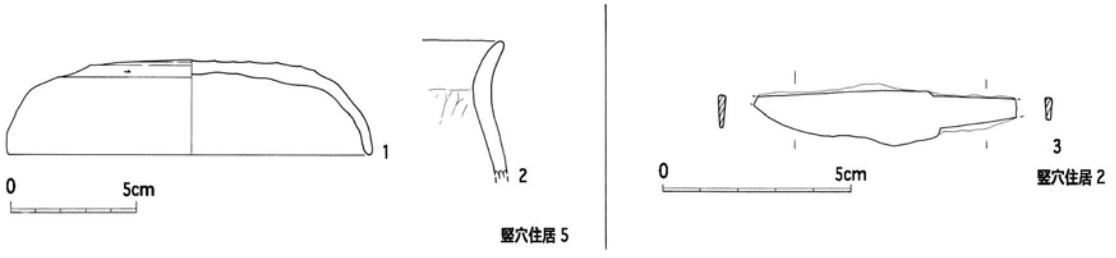


図７　竪穴住居２・５出土遺物（1/3，1/2）

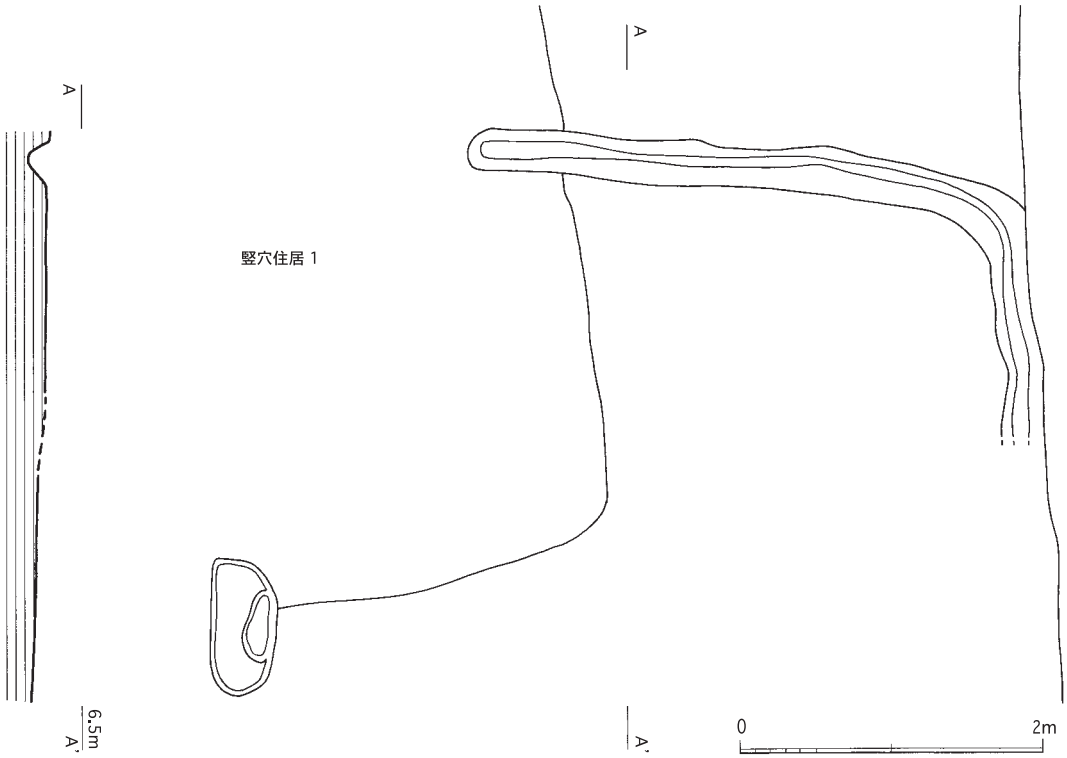


図８　竪穴住居２（1 / 50）

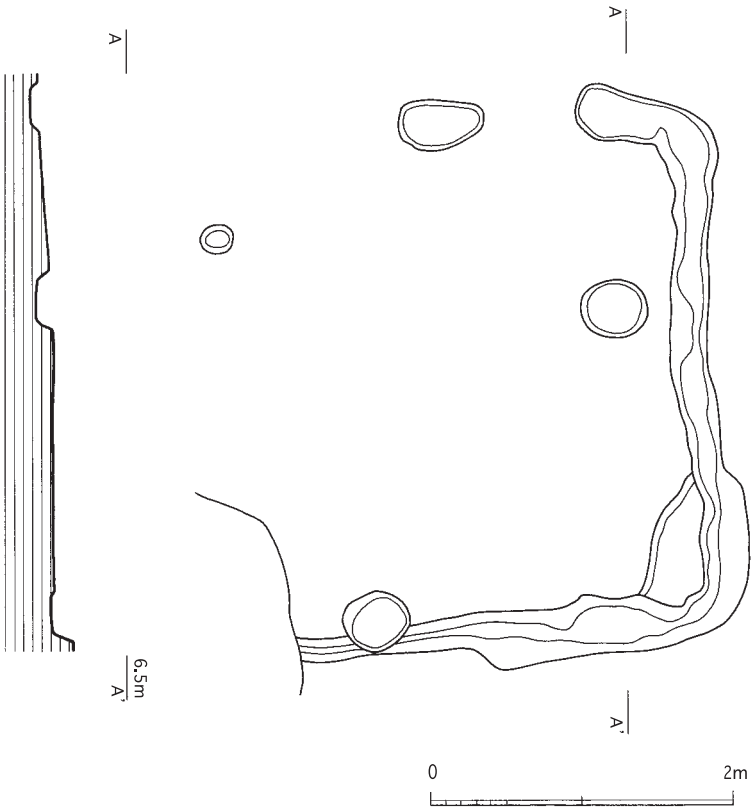


図９　竪穴住居３（1 / 50）

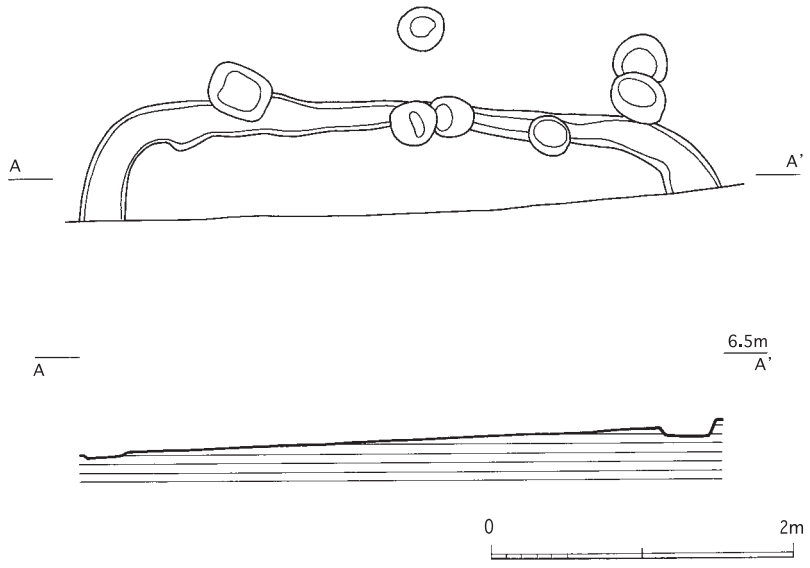


図 10　竪穴住居４（1 / 50）

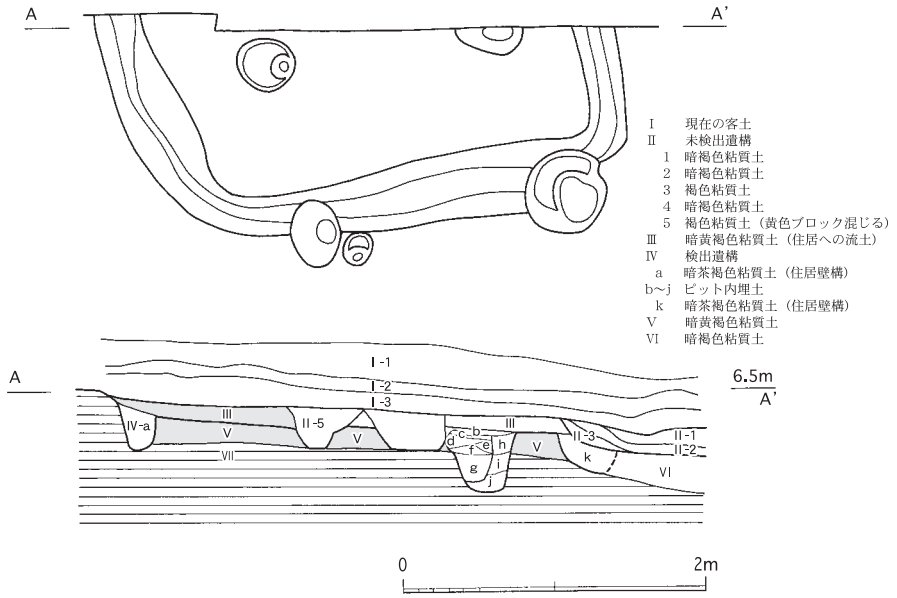


図 11　竪穴住居５（1 / 50）

m、東西3.3～3.4mを測る。検出した柱穴をみると、東西方向に10～40cm 程ずれて２つが切り合い、もしくは並列していることが看取できる。これは、この建物が一度建て替えを行っていることを示しており、柱穴の土層を観察すれば、立て替え時には、建物はわずかに西側へ移動していることが分かる。柱穴は円形を呈する。

出土遺物（図16―1～3）

柱穴出土の遺物は小片が多く、図化に耐えるものではない。ここではSP207より出土した３点について述べる。１は須恵器杯蓋口縁部片である。端部は丸く収めている。２は須恵器蓋排天井部片である。天井部には回転ヘラケズリを施し、体部との境には浅い段を有しているようだ。３は平瓶等、瓶類の口縁部片である。口頸部の外面にはヘラ記号を有する。

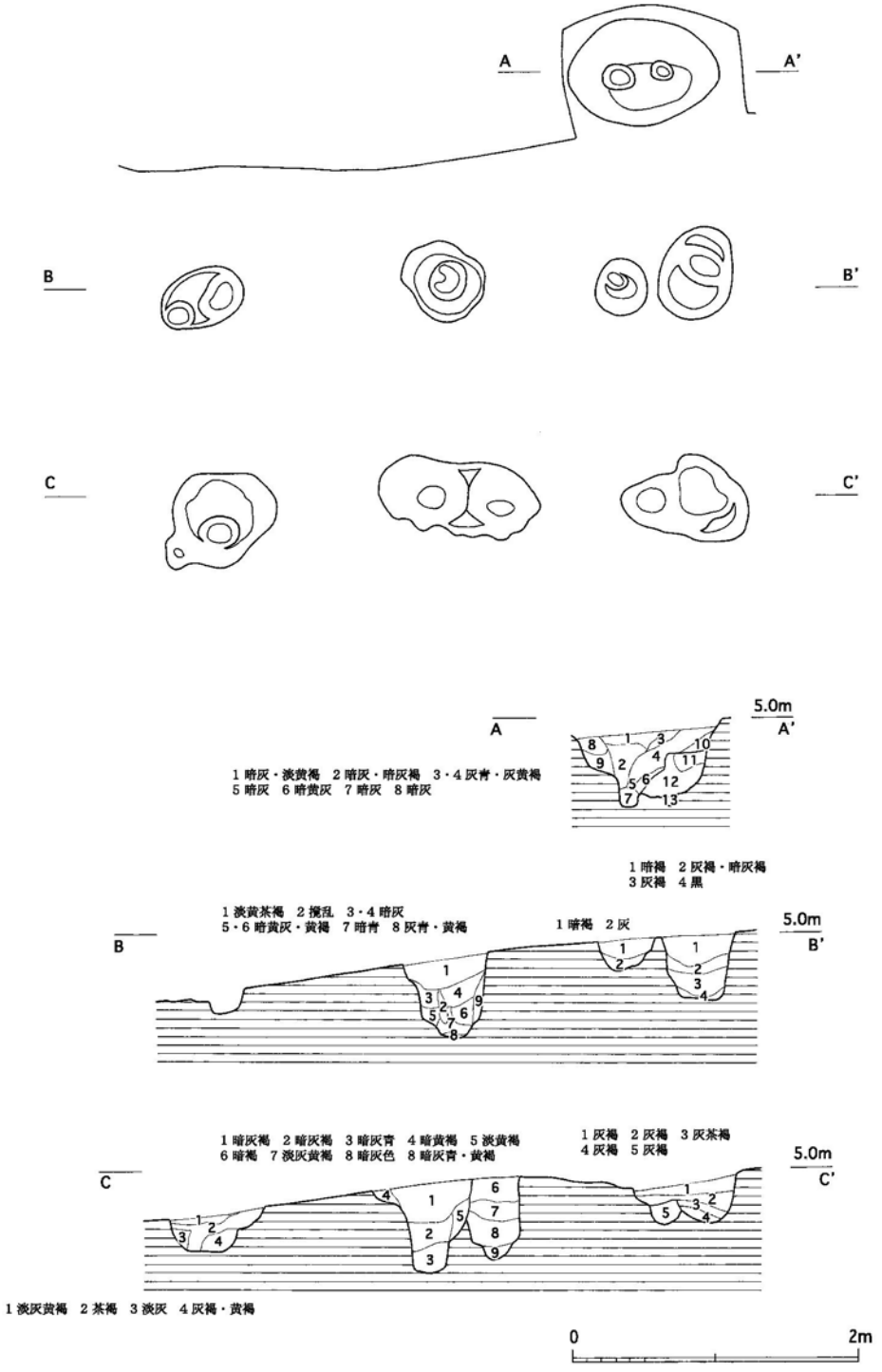


図 12　掘立柱建物 1 （1 / 50）

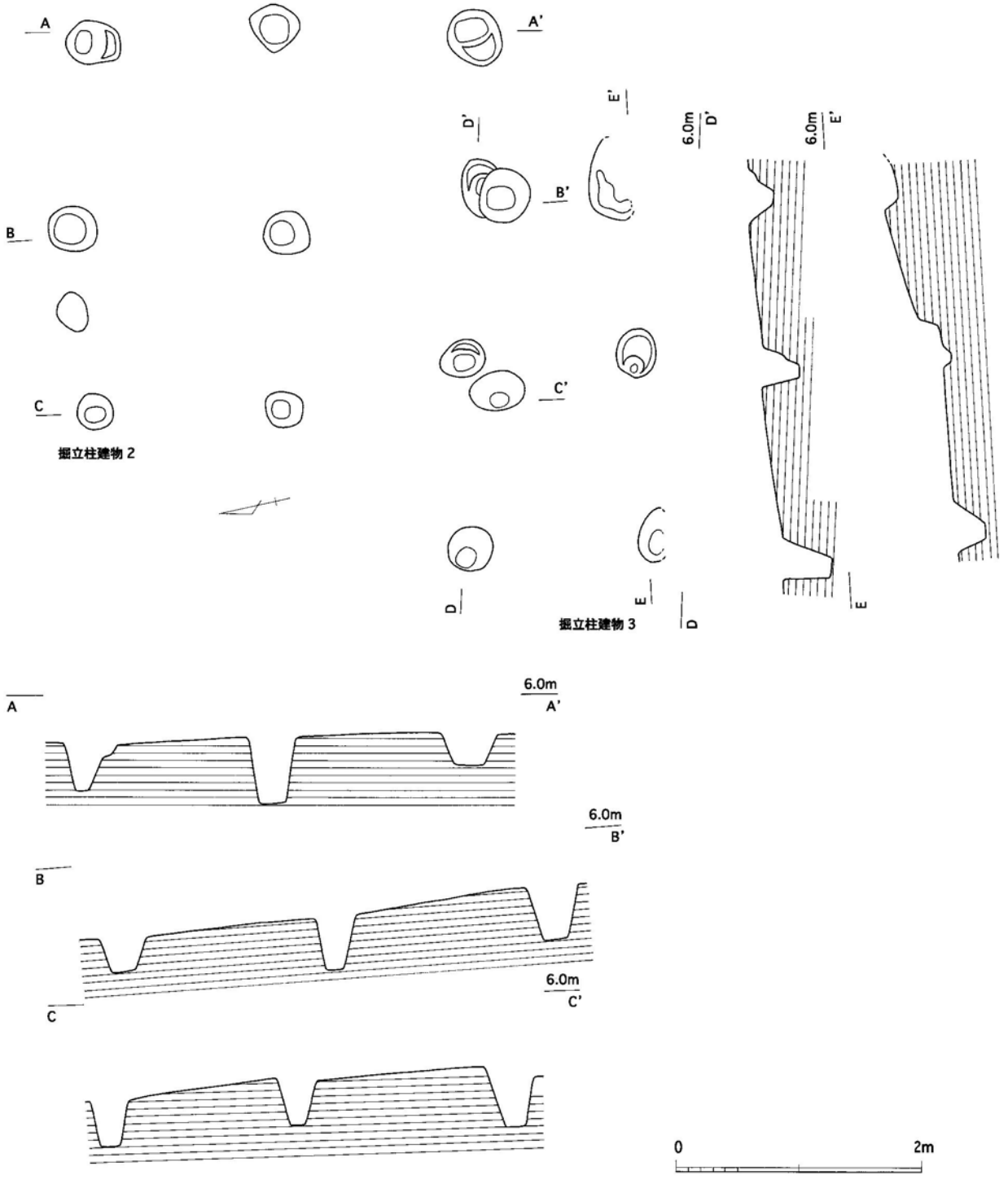


図 13　掘立柱建物２・３（1 / 50）

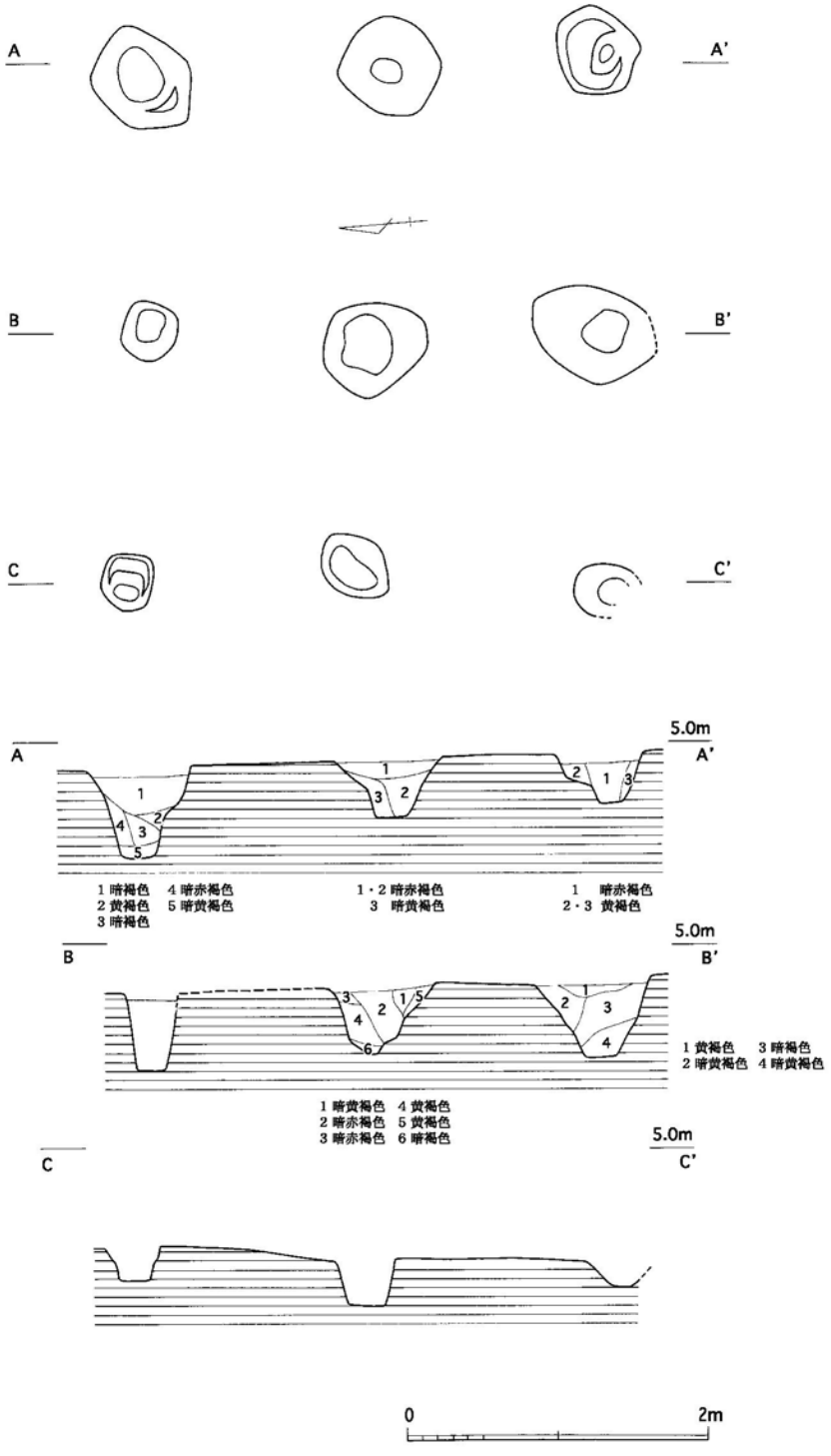


図 14　掘立柱建物 4（1 / 50）

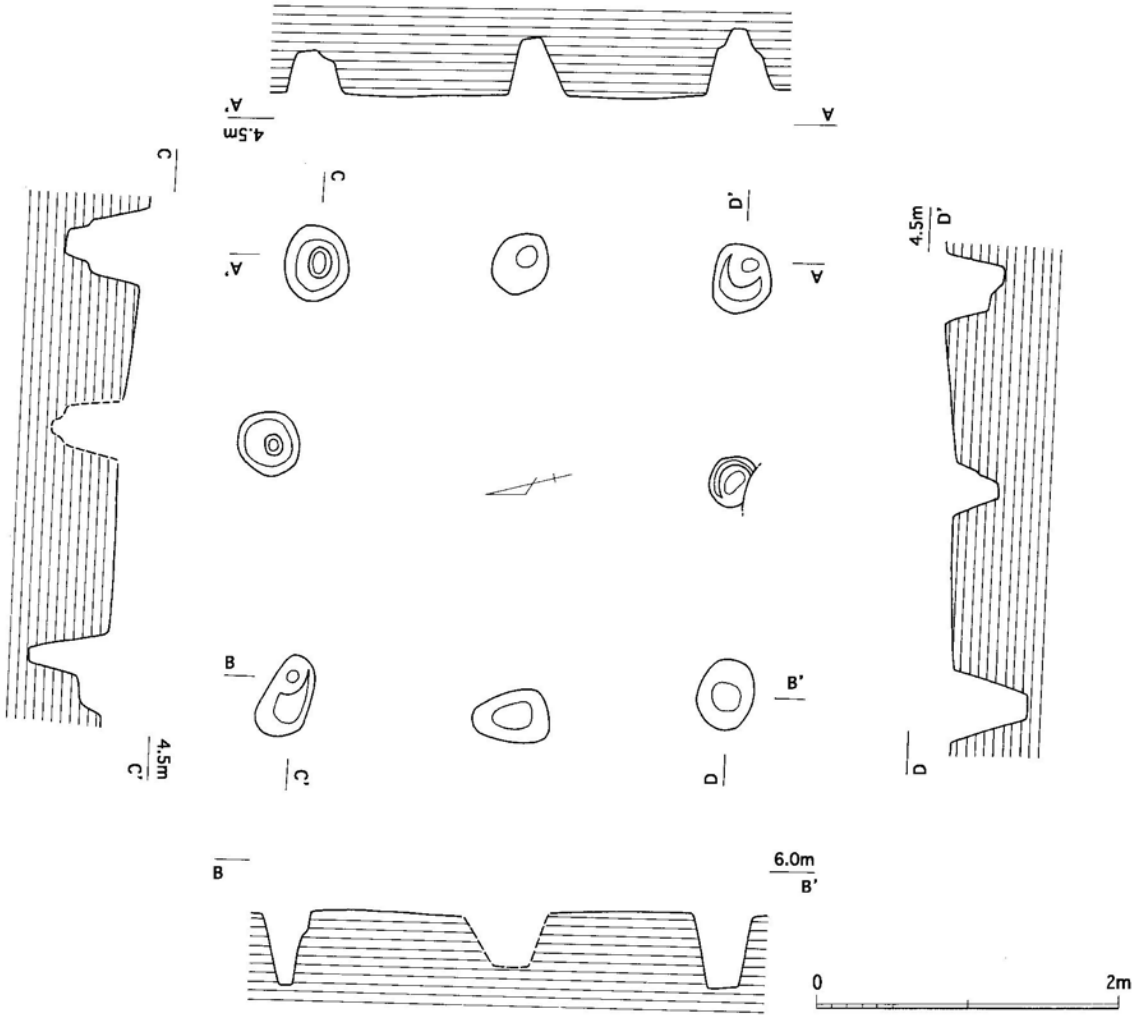


図 15　掘立柱建物５（1 / 50）

掘立柱建物２（図13）

調査区の中央やや南よりの位置に存在する。ちょうど竪穴住居５の北東側隣りに位置し、柱穴の一つは掘立柱建物柱穴と切り合う。２×２間の総柱建物で、建物の主軸をN―9°―Eに取り、規模は南北３～3.2m、東西2.6～３mを測る。規模、主軸方向とも掘立柱建物１とほぼ等しい。切り合いから、掘立柱建物３に先行するものといえる。

出土遺物（図16―４）

ここではSP130より出土した資料について述べる。４は須恵器高杯脚部片である。脚部には長方形の透かしが３方向から２段に穿たれている。外面にはカキメ調整を行い、各段の透かし孔の間には１条の沈線を施す。

掘立柱建物３（図13）

調査区の中央南端に位置するもので、竪穴住居５の上を切り込んで存在する。柱穴の一つは掘立柱建物2と切り合いを持つ。建物部分の一部が調査区内に存在するに過ぎないが、この調査区内における他の掘立柱建物をみれば、２×２間の総柱建物である可能性が高い。建物の主軸はN―７～９°―Eで、規模は東西2.8～３mを測る。規模、主軸方向とも掘立柱建物１・２とほぼ等しい。切り合いから、掘立柱建物２より新しく位置づけられる。

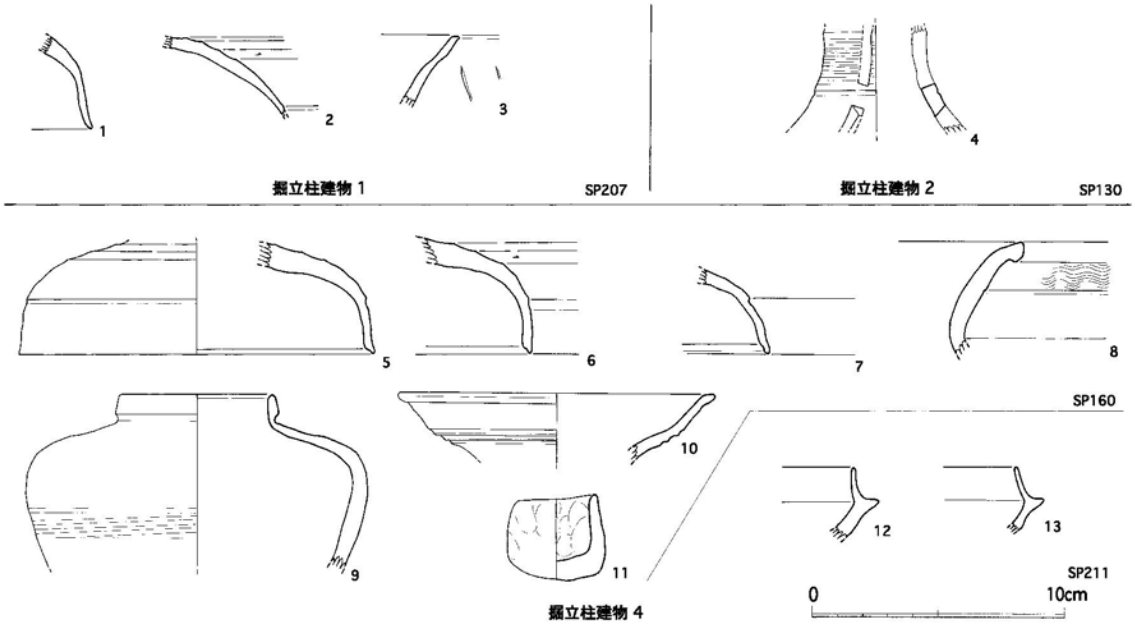


図 16　掘立柱建物出土の遺物（1 / 3）

出土遺物

少なく、各柱穴から土器の細片がわずかに出土したのみである。

掘立柱建物４（図14）

調査区の中央、やや南寄りに位置する。掘立柱建物２・３の西側、掘立柱建物１の南側にあたる。２×２間の総柱建物で、建物の主軸をN―２～５°―Ｅに取り、規模は南北3～3.2m、東西2.6～3.4mを測る。規模、主軸方向とも他の総柱掘立柱建物とほぼ等しい。

出土遺物（図16―５～13）

掘立柱建物４の柱穴（ＳＰ160・211）からは比較的多くの遺物が出土している。５～11はＳＰ160出土、12・13はＳＰ211出土である。５～７は須恵器杯蓋である。５・６は天井部に回転ヘラケズリを有し、天井部と体部の境には沈線を施す。また口縁端部は段をなしている。５は口径（復元）14.0cm を測る。７は天井部と体部との境が浅い段をなし、口縁端部には弱い沈線を施す。８は須恵器甕口縁部片である。口縁端部は肥厚し、口頸部半ばには浅い沈線を施す。そして口縁部と沈線との間に波状文を描いている。９は須恵器短頸壷である。肩部が大きく張り、口縁部は肥厚する。胴部には一部カキメ調整を施す。11はミニチュア土器である。手づくねによる整形。12・13は須恵器杯身である。立ち上がりはやや高く、内傾する。端部は丸く収めている。

掘立柱建物５（図15）

調査区の西側に存在する建物である。２×２間の側柱建物で、建物の主軸をN―13°―Ｅに取り、規模は南北2.8～2.9m、東西2.8mを測る。規模の点では、他の総柱掘立柱建物とほぼ等しい。

出土遺物

少なく、各柱穴から土器の細片がわずかに出土したのみである。

Ｃ．土坑（図17）

調査区内にはいくつか不定形な土坑が存在する。いずれもごく浅いもので、出土遺物も数少ない。ここでは土坑１～４とし、その所見について記すことにする。

土坑１

調査区中央、竪穴住居１の西側に存在する。いびつな円形を呈し、一部を攪乱により切られている。深さは10cm程で、底面は南側へ向かって傾斜している。出土遺物は土器の細片のみである。

土坑２

土坑１の南東側に存在するもので、一部を竪穴住居３、および溝に切られている。いびつな円形を呈し、底面はほぼ平坦である。深さ数 cm ほどしか残っておらず、出土遺物も土器の細片のみである。

土坑３

調査区の中央に位置し、一部を掘立柱建物４の柱穴に切られるもので、いびつな方形を呈する。底面においても、やや凹凸が激しい。遺存状況は悪く、深さ数cm程しか残っていない。

出土遺物（図18）

土器の細片のみの出土ではあるが、１点のみ図化を行った。図18は須恵器杯蓋口縁部片である。口縁端部は段をなし、体部の半ばは浅い沈線が巡る。

土坑４

土坑３の南側に存在するもので、一部を掘立柱建物４の柱穴に切られる。楕円形の平面プランを有し、断面はすり鉢状を呈している。深さ十数cmほどしか残っておらず、出土遺物は土器の細片のみである。

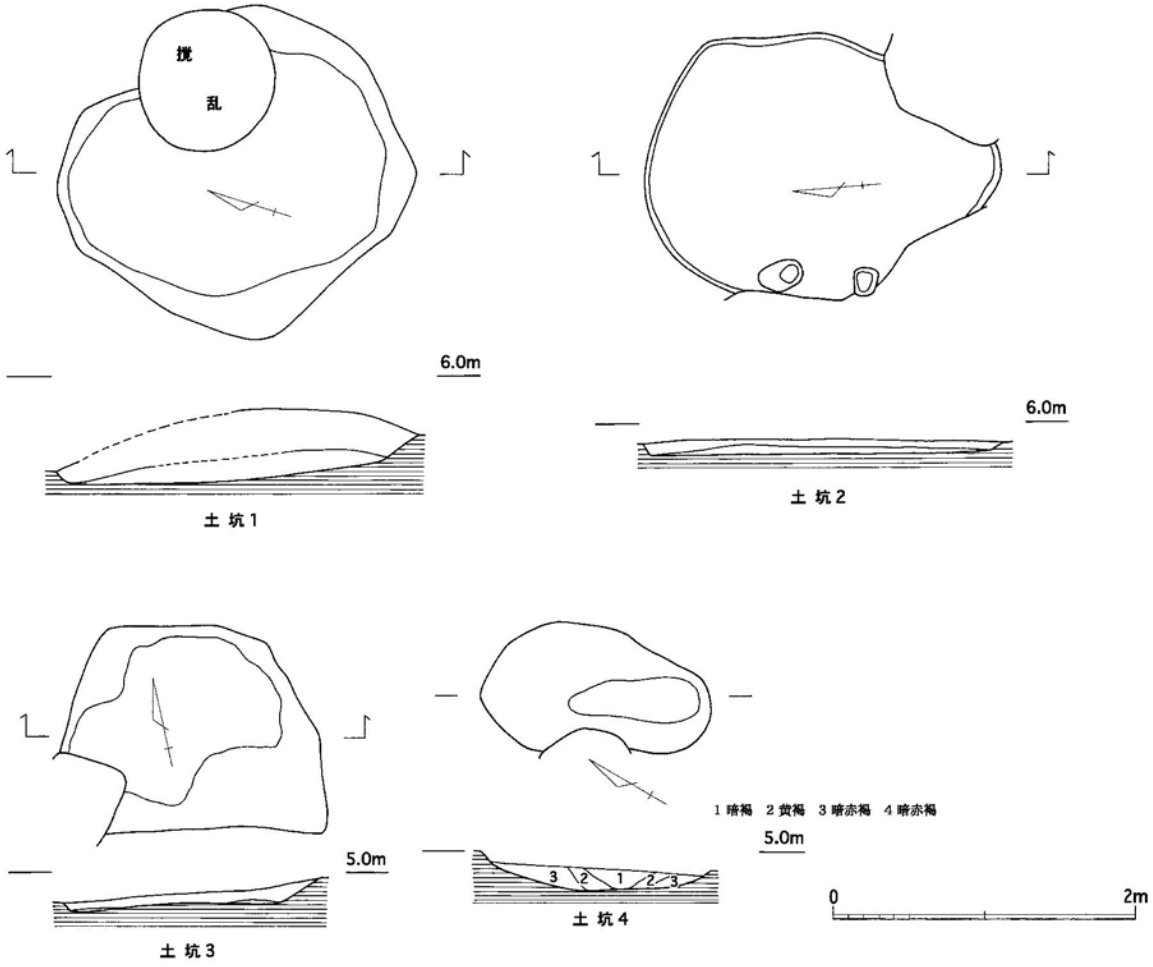


図 17　土坑１・２・３・４（1 / 50）

D．溝

調査区の中央および西側にはいくつかの溝状遺構を検出した。特に中央部のそれは互いに切り合いを持つ。いずれの溝も幅20～50cm、深さ十数cmを測り、遺構の遺存状況は悪い。これら溝は各竪穴住居の壁溝とほぼ同じ規模、深さであり、中には「く」の字に折れ曲がるものが存在するという状況をみれば、これらの内のいくつかは竪穴住居の壁溝であった可能性が高い。

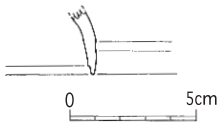


図18　土坑3出土遺物（1/3）

出土遺物（図19）

溝の遺存状況は悪く、出土遺物は土器の細片が主体を占めているが、いくつかの溝（SD06・10・17・18）において図化可能な個体が存在した。図19にそのいくつかを示し、以下に所見を述べる。１は須恵器杯蓋である。天井部には回転ヘラケズリを施し、口縁端部には浅い沈線が巡る。口径14.4cm、器高3.6cm を測る。SD06より出土。２・３は土師質の椀で、いわゆる模倣杯と呼ばれるものである。いずれも器面の摩耗が激しい。SD18より出土。４は須恵器短頸壷口縁部片で、口縁部は短く直立し肥厚する。５は須恵器杯身口縁部片。6は須恵器甕口頸部片である。口径（復元）18.0cmを測る。４～６はSD17より出土。

(2) 包含層出土の遺物

先にも述べたように、調査区の斜面部分には間層を挟んで、２層の遺物包含層が存在する。遺物は古墳時代後期に相当するものがほとんどを占めており、上下層に大きな違いはない。よってここでは、両者を一括して報告することにする（図20）。

１は須恵器杯蓋である。天井部には回転ヘラケズリを施し、天井部と体部の境には浅い沈線が巡る。口縁端部はわずかに段をなす。口径（復元）12.6cm、器高3.8cmを測る。尚、天井部にはヘラ記号を有する。２・３は須恵器杯身である。２は口径（復元）13.6cm、受部径16.0cm、器高3.6cmを測る。杯内面にはヘラ記号を有する。底部には回転ヘラケズリを施す。３は口径（復元）12.2cm、受部径14.4cm、器高3.8cmを測る。立ち上がりは短いが比較的直立する。底部には回転ヘラケズリを施す。４・5は高杯である。５は方形の透かしを3方向より穿つ。脚端部は上方へ折り返す。６はミニチュア土器で、全面にユビオサエの痕跡が残る。口径3.2cm、器高4.4cmを測る。７は甑の把手である。８は支脚である。円柱状を呈し、14.5cm、幅5.8cmを測る。上下端部は比較的平坦に仕上げている。部分的にユビオサエの痕跡が残る。土師質だが、強い被熱を受けてはいない。９は砥石である。破損部分以外にはすべて使用の痕跡が認められる。

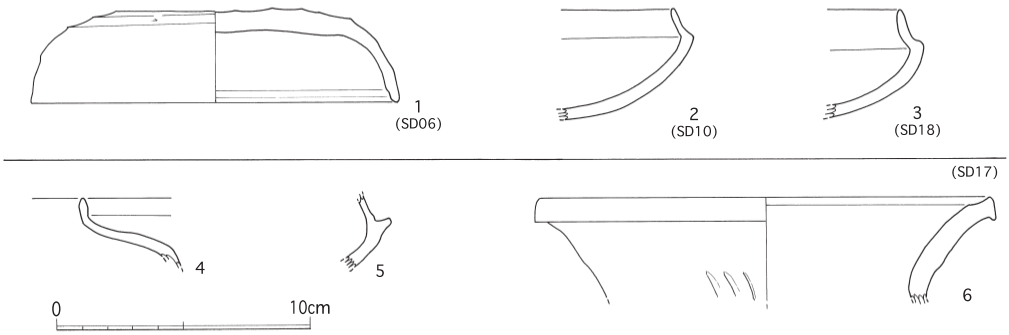


図 19　溝出土遺物（1 / 3）

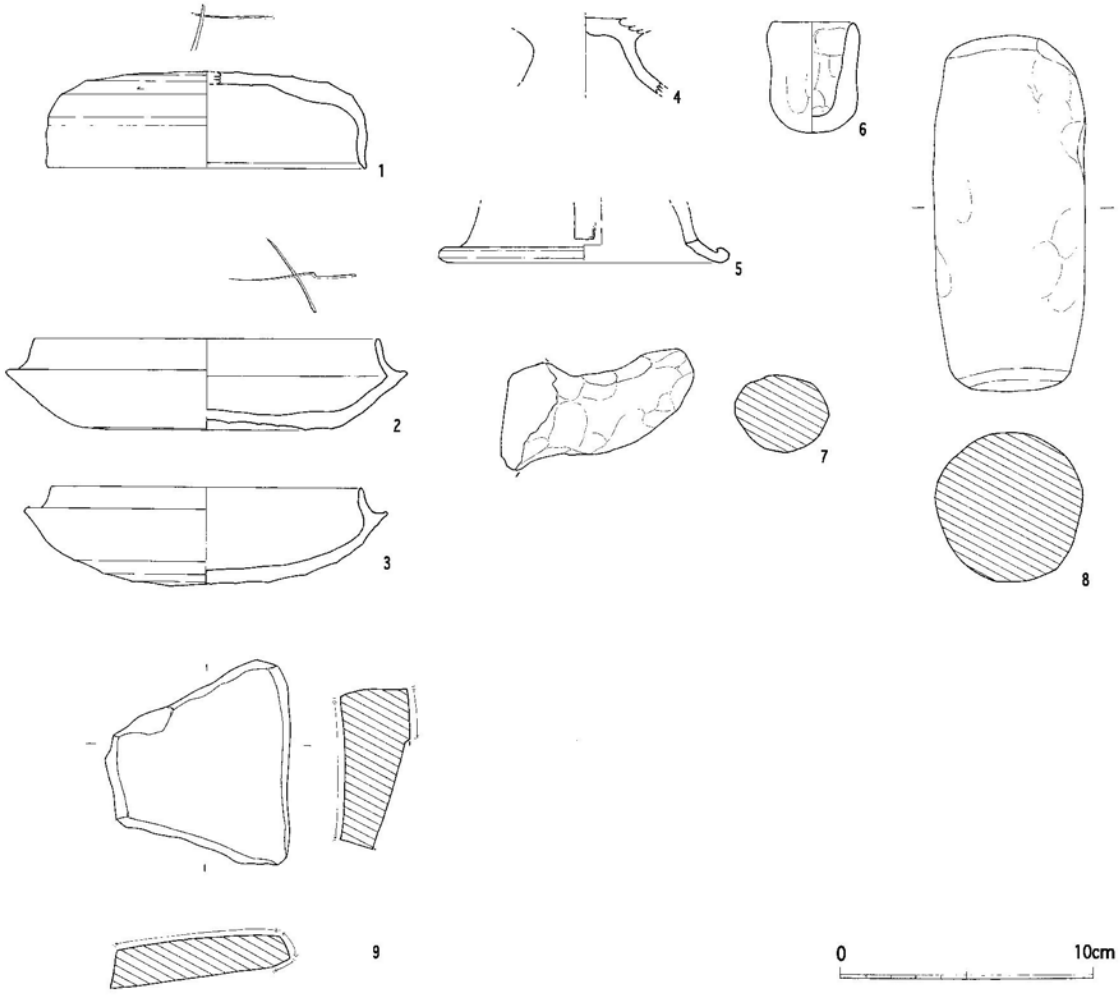


図 20　包含層出土の遺物（1 / 3）

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、遺跡が激しい削平を受けていたにもかかわらず、多くの成果を挙げることができた。検出遺構は確認できるものはすべて古墳時代後期に相当し、出土遺物もほぼその時期に限られる。今回調査における主要な遺構として、竪穴住居と掘立柱建物を挙げることができる。遺物からみてこの両者に大きな時期差を指摘することはできないが、掘立柱建物の柱穴の多くが住居や壁溝となる可能性のある溝を切り込んでいるところをみると、掘立柱建物群は竪穴住居群に若干後出するものであるといえよう。しかし、各建物群と住居群は軸線をほぼ等しくして存在しており、この両者が有機的な関連を持って営まれていたことは間違いない。出土遺物をより細かくみれば、ＴＫ10（古）型式期からＴＫ209型式期までとかなりの幅を持つものであり、今回調査における遺構の数々は、この期間内に営まれた古墳時代集落の総体として把握されるべきものであるだろう。

本来ならば、各時期における遺構の消長をみるべきではあるが、調査区域が狭いこと、そして遺出土遺物の少なさから、果たすことができなかった。この問題は周辺地域の調査が進むにつれて明らかとなるだろう。

調査区東側（西より）

調査区西側１（東より）

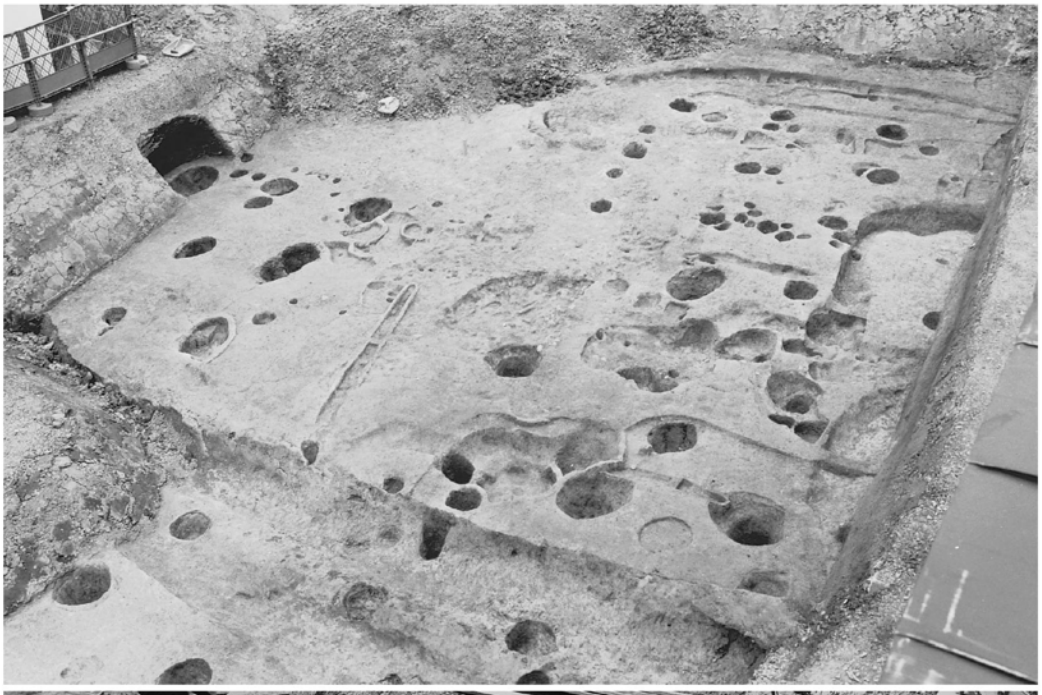
調査区西側２（東より）

図版２

竪穴住居１（南より）

竪穴住居３・４（西より）

竪穴住居５（西より）



掘立柱建物群（西より）

掘立柱建物１（東より）

掘立柱建物２・３（北東より）

図版４

掘立柱建物３（南より）

掘立柱建物４（西より）

掘立柱建物５（西より）

報告書抄録

ふ り が な	いいくらＢいせき
書　　名	飯 倉 Ｂ 遺 跡
副　書　名	飯倉Ｂ遺跡　第２次調査
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第785集
編 著 者 名	藏冨士　寛
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神１－８－１
発 行 年 月 日	2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
いいくら 飯 倉 Ｂ 遺 跡 第　２　次	ふくおかけんふくおかし 福 岡 県 福 岡 市 じょうなんくあらえ 城 南 区 荒 江 1-592ほか	401306		33° 34′ 11″	130° 21′ 23″	20030203 ～ 20030320	433㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯 倉 Ｂ 遺 跡 第　２　次	集 落	古 墳	竪 穴 住 居　5 掘立柱建物　5 土　　坑　4 溝　　20	土師器・須恵器	

飯 倉 Ｂ 遺 跡

―福岡市埋蔵文化財調査報告書第785集―

2004年３月31日

発　行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神一丁目８番１号

印　刷　田 堀 印 刷 有 限 会 社
福岡市中央区草香江一丁目８番24号

遺跡名	遺跡略号	調査番号
飯倉B2次	IKR-B	0259